

S U I N O M A H O U

スイの魔法

5 最後の魔法
SAIGO NO MAHOU

白神怜司
Shirakami Reiji



Main Characters
主な登場人物

マリスティス

『白銀の魔女』。
すべての魔女の起源となる存在。
圧倒的な魔力を持つ。

ユーリ

ブレインル帝国、
近衛師団の師団長にして、
女帝アリアルタの腹心。

タータニア・
ヘイルン

ブレインル帝国に仕える女騎士。
暴風を生み出す
【門】という特殊能力を操る。

アーシャ

スイトと同じ銀髪蒼眼の美少女。
かつては世界を恐怖に陥れた
魔導兵器だった。

アンビー・
ニュタル

『断崖の魔女』。
いつも飄々としている。
魔導兵器の生みの親。

ファラ

伝説の金龍にして、
スイトの忠実な〈使い魔〉。
魔法訓練の良き相手。

シア

『深淵の魔女』。
これまで生存不明だった
謎の魔女。
〈狂化〉才前だと言われている。

スイト

主人公。銀髪蒼眼の孤児。
十三歳。容姿・知性・
魔力を備えた天才だが、
超マイペース。

プロローグ

「シア。マリステイスはおそらく、私達を利用しようとしている」

「……レシュール、落ち着いて」

『深淵の魔女』シアは足を止めると、困ったように苦笑を浮かべて『光牙の魔女』レシュールを振り返った。

ここは浮遊大陸である。六人の『魔女』達は〈狂化〉から逃れる方法を探すため、『白銀の魔女』マリステイスの棲むこの地を訪れていた。

『白銀の魔女』ならば、その呪いを解いてくれると信じて。

マリステイスからは、ある一つの方法が示された。

シアが、レシュールを宥めすかすように言う。

「マリステイスは私達の〈狂化〉を止めるために手を尽くしてくれている。そのために自らの力を

犠牲にして、私には『闇の宝玉』を、アナタには『光の宝玉』を渡してくれたのよ」

「それはそうだけど、でも……ッ！」

「……どうしたの？」

自らを掻き抱くようにして不安におののくレシュール。

その態度は、『魔女』としてあまりにも弱々しい姿であった。

「あの目……私には、得^え体の知れないものが見つめているようにしか思えないんだ」

「ファステイナをあんなに甘やかす人が、私達を騙^{だま}しているっていうの？」

「わからない。わからないんだ、私には。確かにマリステイスは優しい。でも、それなら……！
何故、私はこれほどの恐怖を覚えているのか……！」

ただの考え過ぎだ、とはシアには思えなかった。

それは、このように怯えているのが『光牙^{こうが}の魔女』だから。

レシュールは光の属性を持った『魔女』。

この属性は、直感や予感といった第六感が鋭いという特質を持つ。

研究者気質の『断崖^{だんがい}の魔女』アンビー曰^いく——

「光の属性は、異物を浮き彫りにするから、本能的に違和感を捉^{とら}えることができる。『魔女』ともなれば、その能力は普通の人より鋭いものになるだろう」

——という話だ。

レシュールは、『魔女』となつて日が浅い。

そんなレシュールとシアとの付き合いが長いのは、シアが先代の『光牙^{こうが}の魔女』とも面識があつたためである。

『深淵^{しんえん}の魔女』として闇の能力に特化していたシアは、自らの能力と対^{たい}の関係にある『光牙^{こうが}の魔女』に興味を抱いており、レシュールが『光牙^{こうが}の魔女』になるべく、先代から力を〈継承〉したときにも立ち会っていた。

『光牙^{こうが}の魔女』の勘の鋭さには、シアも一目置いている。

だから、この過剰とも言えるレシュールの反応を見過^すすわけにはいかなかった。

「……レシュール。私も、マリステイスが『宝玉』を、何の見返りもなく渡すなんて思わないわ」
「だったら——ッ！」

「それでも、私には時間がない。すでに私には〈狂化〉の兆候があるし、何をきつかけに自我を失うかわからない状態なの。だから、マリステイスが何を企んでいるにせよ、関係ないと思つてい
るわ」

たとえばマリステイスが自分達を利用しようとしているとしても、もう迷っている暇などない。そうシアは考えていた。

けれど——と、彼女は続けた。

「アナタにはまだ時間がある。もしもアナタがマリステイスの目的を知ることができたら、そのときは——アナタが思う道を進み、正しいと思う行動を取りなさい」

「……私が、正しいと思う、行動を……？」

「ええ、そうよ。私の次は、おそらくノルーシャ。いずれはアナタやヒノカが〈狂化〉の餌食になる。それまでに答えを出せたら、そのときは……——」



「——そのときは、できる限りのことをしてみせる。そう約束してしまったから、アナタは苦しんでしまったのね、レシュール……」

誰もいない薄暗い部屋の中。

漆黒のドレスを纏ったシアは、そっと目を閉じた。

レシュールが何を想い、何を託してくれたのか、シアには理解することができた。今の彼女の中には、レシュールの見てきた全ての記憶が息づいている。

そっと胸に手を当てて、自らの心音を確かめる。

ゆっくりと目を開けると、シアの足元に影が広がっていた。部屋のすべてを真つ暗な闇が覆い、走っていく。

そうしてアルドヴァルド王国内の影という影と自らの闇をつなぐと、人々の会話の声や情景が津波のように彼女の頭の中を埋め尽くした。

シアはふと眉を顰める。

「……『魔人』？」

かつて耳にしたことのある、その言葉。それは、本来生まれるべきではない存在を指すものであったはず。

シアは遠くを見据えるような目をする。まるでそこに誰かがいるように。

「……ええ、わかっているわ、レシュール。アナタの願いは、必ず私が成就させてみせる」
闇から意識を引き上げると、さらにシアの身体は闇に吞まれていった。

「心配しないで。私が——マリステイスの陰謀を止めるから」



——ドクン。

脈打つ鼓動。

流れ続けていた時間が終わりを迎え、条件が揃ったという合図を示す音。

空に浮かんだ大陸の草原で、光が集まり——人の姿を成した。

吹き抜ける風に揺れる銀色の長い髪。ゆっくりと開かれた金と蒼の瞳。その二色の双眸は感情を一切宿さず、地上を見下ろしていた。

「……時は来たのね」

囁くような、女の声。

冷たく告げられたその言葉を耳にする者も、それが何を意味しているのか知る者も、ここには存在しない。

「あらゆる条件が、ようやく揃う。永い悲願が——やっと叶う」

全てはシナリオ通りに運んでいる。

彼女の描いた未来は——すぐ近くにまで迫っていた。

1 全ての道はヴェルディアへ

始まりは、『魔女』の呪い——〈狂化〉。

それは強大な力を持つてしまった代償である。

膨大な魔力が身体に負荷を与えて崩壊を引き起こし、溢れ出た魔力が意思を持つつかのように周囲の魔素を喰らい尽くす。そしてありとあらゆる生命から魔力を奪い取る化け物と化してまう。

その呪いは、エイネスと呼ばれた大魔法時代、当時名を轟かせていた六人の『魔女』に遡る。

代々『魔女』は、力と共に〈狂化〉の真実を〈継承〉してきた。『魔女』の力を素質のある人間に託し、自らも力の一部となって消えてしまうことで、〈狂化〉を回避してきたのである。

しかし、それは先延ばしに過ぎなかった。

根本的な解決法が見つからないまま〈継承〉を重ね、代を重ねる毎に肥大化した『魔女』の力は、制御不能に陥ろうとしていた。

——もうすぐ〈継承〉は使えなくなるだろう。

そう考えた『魔女』達は、『魔女』の綽名の由来である始祖——『白銀の魔女』マリスティスのもとを訪ねた。自らの身体を蝕む〈狂化〉を、自分達の代で断ち切ろうと考えたのだ。

マリスティスの協力は得られたが、彼女として全能ではなかった。

成果が得られないまま徒に時間が過ぎ、マリスティスは苦肉の策を打つ。

『宝玉』という魔力体に、自分の力を分割し、『魔女』達に手渡したのだ。
 『宝玉』によって周囲の魔素を高純度の魔力に変換し、『魔女』達の負担を軽減させる。同時に、彼女達の肉体と精神を封印することで、時間を引き延ばす。
 さらに、マリステイスは、『魔女』を解放する手段にも着手した。自分では十全に扱いきれない『無』の魔法を、適合性を高めた存在に受け継がせようと考えたのだ。

——それが、スイという一人の少年が生まれた背景である。



ここは、ガルソ島にある、人の侵入を拒むかのような深い森——幻惑の森。
 この二年間、『螺旋の魔女』ノルーシャのもとで修業を続け、ついに自分の出生の秘密を知ることとなった銀髪の少年——スイは、旅立ちを前に、自らの短い人生を思い返していた。

——スイは、『自分』がわからなかった。

教会という孤児の集まる環境。

血の繋がりのない集団。

生来、物静かなスイは、ただその事実だけを漠然と理解し、受け止めていた。

シスターや神父、同じ境遇の孤児らが、自分にとって家族であると頭では理解しているが、心のどこかでは他人だと思っていた。

いつしか彼は、誰にも迷惑をかけないように周囲と距離を置くようになった。

——「スイは頭の良い子供だ、手がかからない子供だ」と大人は言う。

そういった評価に應えるように、スイは自分の意見を主張することなく、ただ周囲に合わせてきた。

そうして、ヴェルディア王立図書館に籠り、自分のルーツを探るために本を読み漁った。

——多くの知識を得れば、自分が何者なのか理解できるのではないか。

それが、スイが知識を得ることに夢中になった理由だった。

スイが十歳を迎えたとき、彼の環境は一変した。

魔法学園での新しい生活。

突然姿を現した金龍のファラと、〈使い魔〉の契約を結んだ。
旧エヴンシア王国の騎士見習い、タータニア・ヘイルンとの邂逅、そして『放棄された島』への漂着。

ブレインル帝国によって拐かされ、そこで出会った『銀の人形』——アーシャ。
ヴェル襲撃事件では、無力な自分を呪った。

ノルーシャのもとで己の宿命を知り、二年間の修業の日々を過ごした。

そして——自らに託された、『魔女』の願い。

たった三年間。

それまで揺れ動くことのなかった感情は大きく揺さぶられ、そのおかげでスイは良くも悪くも『自分』の感情を知ることになり、自らに与えられた使命を受け入れた。

そうして、師であるノルーシャを、『魔女』が背負う宿命から解放したのだ。
目の前に佇むログハウスの主は、もう帰って来ない。

「——スイ」

声をかけられて振り返る。

これまでに会って来た仲間達が、彼を見つめている。

赤髪の剣士、タータニア。

ブレインル帝国の『狂王』アイルタ・ブレインル・メトワの腹心、ユーリ。

師ノルーシャと同じく、『魔女』の称号を持つ、アンビー・ニュタル。

運命に翻弄され、彼と刃を交えた『銀の人形』、アーシャ。

その横には、スイにかけられていた【魅了魔法】を解いた、ミルテア。

そして、見送りに来てくれた兄弟子のルスティア・フェズリーと、姉弟子のネルティエ・グライ
エス。

ノルーシャの従者であり、賢虎でありながら猫の姿を好む、シャムシャオ。

仲間達を一瞥し、スイは決心したように口を開く。

「お待たせしました」

「もう、いいのかい？」

そう言ってアンビーは言葉を継ぐと悩んだが、結局、何も言わなかった。

スイに背負わせてしまった宿命。

アンビーもまた一人の『魔女』であり、いずれスイの力によって消してもらうつもりだった。だから、スイとはあまり親しくすべきではないと考えていた。

スイは、ルステシアとネルティエの二人と別れの挨拶をしている。

「スイ、短い間だったけれど、キミと過ごした時間は忘れない。また会おう」

「私もよ。お師匠様の願い、叶えてね」

「……はい。僕も絶対忘れません。落ち着いたら、また会いに来ますね」

「二人とも、この国はノルーシャ様の故郷です。——頼みましたよ」

横合いから声をかけたのは、シャムシャオである。

シャムシャオは、力強く頷く弟子にふっと笑みを浮かべ、スイと共にアンビー達のところに歩み寄った。

アンビーが口を開く。

「それじゃあ行こうかね。スイ君の故郷へ」

地面につま先をトンと打ち付けると、大きな魔法陣が浮かび上がった。アンビーの得意とする【転移魔法】である。

スイは、魔法陣の中からルステシアとネルティエ、そして彼らの背の向こうにあるログハウスを

もう一度見つめ、万感の思いを込めて口を開いた。

「行ってきます」

スイがルステシアとネルティエに別れを告げると、七人は光に包まれた。



ヴェルディア王国王都ヴェルから北東に広がる、森の中。

突如として浮かび上がった黄色い魔法陣が一際強い光を放つと、数名の女性と一人の少年が姿を現した。

スイの一行である。

「ふむ、転移は成功かな。さすがにこの人数になると消費量も大きいね」

首から下げていたペンダントを外したアンビーが、赤い宝石が嵌め込まれたそれを手のひらで転がしながら眉根を寄せた。

「それは？」

「これは蓄魔石と言ってね。私の魔力を蓄積させて、魔力の代用になっているのさ。魔導兵器を造る際に動力としても使っている代物だよ。アーシャ、頼めるかい？」

スイの問いかけに答えるアンビーから蓄魔石を手渡されたアーシャが、それに魔力を注いでいく。すると、光を失っていた赤い宝石がキラキラと煌きを取り戻した。

「わあー、綺麗ですー」

「確かに綺麗ね。それに魔力を貯めて、いざというときに魔法を使えるなら、かなり有用だわ」
感激するミルテアの横で、ユーリが冷静な分析をする。そんな二人の反応にアンビーは苦笑を漏らしながら告げた。

「ミルテアは何度も見ているだろうに……。——ユーリくんの言う通り役には立つんだけど、この蓄魔石はそう数が採れる代物じゃなくてね。それに、一度魔力を馴染ませると他の人の魔力は一切受け付けないから、都合がいいだけでもないんだ」
「それじゃあ、アーシャが代わりに補給できたのは、アーシャの核とアンビーさんの魔力が関係しているから、かな？」

スイが質問すると、脇からアーシャが答える。

「ええ、その通りよ。私の核はアンビーの魔力を利用して活性化したものだから、本質は同じ魔力になるの」

「そういうわけだね。もつとも、私が自分でやろうとすると、外に漏れる魔力だけを使うことになるから一日はかかってしまうけれどね」

自分の魔力を使うと〈狂化〉が進んでしまうため、アンビーは魔法をこの蓄魔石で運用しているのだ。

「さて、行動方針を定めておこうか」

ペンダントを首にして、アンビーは改めて情報を整理していく。

スイ達の目的は、残り三つとなった『宝玉』を手に入れ、『魔女』を〈狂化〉から解放することだ。

しかしながら、スイに敵対するいくつかの勢力が存在している。その一つが『光牙の魔女』レシュールである。

アンビーは、まずはそれぞれの『魔女』——『光牙の魔女』レシュールと『深淵の魔女』シア、『紅炎の魔女』ヒノカの居場所を調べる必要があると考えていた。

シアの消息は一切不明。

ヒノカがいたリヴァーステイル島は調査済みであり、そこにはヒノカの姿も『宝玉』もなく、不毛な荒野が広がっていた。

その痕跡から、ヒノカは〈狂化〉の果てに消失し、ヒノカの持っていた『炎の宝玉』はレシュールの手に渡っている可能性が高い。それがアンビーとノルーシャの見解であった。

よって、目下の目的はレシュールの居場所を探ることになった。

「——やっぱりアルドヴァルド王国の内部が怪しいと私は睨^{にら}んでいるよ。彼の国がスイ君を執拗^{しつよう}に狙^{ねら}っていた点や、アーシャを利用したという点から考えても、『魔女』が関わっているとは思えないからね」

そう言っつて、アンビーは説明し終えた。

ユーリが、ふと気づいたようにアンビーに質問する。

「ん、そういえばアンビーさん。アナタ、アルドヴァルド王国の使者として、ヴェルディア国王のバレン陛下に謁見^{えつけん}しているわよね？」

「ああ、知っていたのかい。さすがはブレインル帝国の女帝の腹心^{ふくしん}だね。けれど、私が務めたのはアルドヴァルドとヴェルディアの窓口のみ。アルドヴァルドの深いところは知らないんだよ」

長い封印から目覚めたアンビーは、エイネスの時代に関わりがあったアルドヴァルド王国に行った。そこでいくつかの魔法論文を書き、アルドヴァルド王国に恩を売ることに成功し、居座ることになった。

一方で、アルドヴァルド王国が『銀の人形』——アーシャを利用したことに疑問を抱き、内部事情を探ろうともしていたものの、『断崖^{だんがい}の魔女』であることから監視下に置かれ、自由に動けずいたのであった。

「——今度こそ、あのときの借りを返す必要がありそうだね」

もし、当時アンビーがアルドヴァルド上層部を調べていれば、レシュールの存在に気づいたかもしれない。だが、彼女は、アルドヴァルド王国の動きにそれほど興味を抱いていなかったのだ。

そんなアンビーにシャムシャオが冷たく言い放つ。

「過ぎたことを言っても仕方ないでしょう。それで、どう動くつもりなのですか？」

「まあね。言う通りだとも。——で、私はこれからシャオを連れて、アルドヴァルド王国を探ってみようと思っているんだ。今言った通り、それなりの伝手^{ついで}もあるわけだしね。情報が入り次第、こっちに戻ってくるつもりだよ」

「私が同行した方がいいんじゃないかしら？」

「嬉しい提案だけれど、キミにはヴェルでミルテアの世話をしてほしい。荒事^{あらじ}が苦手な彼女を守り慣れているだろうしね」

アンビーの蓄魔石^{ちくませき}に魔力を貯めることができるため、同行を進言したアーシャであったが、アンビーは断った。そうして、一人所在なげに立っているミルテアへ顔を向ける。

「ミルテア」

「は、はいっ！」

「キミとアーシャのおかげで、私の不出来な子供達を眠らせることができた。キミには感謝してるよ」

この二年間、ミルテアはアンビー達に同行し、かつてアンビーが生み出した魔導兵器を破壊して世界を回ってきた。アンビーは彼女の尽力に心から感謝していた。

「厄介なことに、アルドヴァルドは何かしでかそうとしている。また魔導人形が投入されることもあるだろう。キミの魔法はそれらを一蹴できる力を持っているけれど、キミの心は戦いに向いているとは言い難い。もしも戦う覚悟がないなら——」

「大丈夫です」

アンビーの言葉を遮り、ミルテアはアンビーをまっすぐに見て答えた。

「えっと、確かに私はアーシャさんみたいに強くないです。でも、逃げるのは嫌なんです。もう逃げたくないんです」

その言葉は、ミルテアの決意の表れだった。

ミルテアは元々、旧カロッセ王国の王女でありながら、国を捨てたという過去を持つ。

彼女の【特殊魔法】である【浄化の光】——全ての魔法を解除してしまうという力を利用し、戦火を広げようとした者達の手から逃れ、亡命したのだ。それは彼女にとって、逃げであった。

弱かった彼女はアンビーと共に二年間奔走すること、自信を養ったのだ。

ミルテアの意思を認めるように、アーシャが続ける。

「心配いらないわ。この子の世話ぐらい、もう慣れたわ」

「アーシャさん……！　じゃあ、お姉ちゃんって呼んでいいですかっ！」

「どうしてそこで『じゃあ』になるのよ。遠慮させてもらうわ」

アンビーはそんな二人のやり取りに両手を上げて頭を振ると、ユーリを見た。

「アーシャとミルテアの二人は対アルドヴァルド戦で心強い味方になると保証するよ。実際に私と一緒に世界中を回ったんだから、お世辞や過大評価ではなくね」

アンビーの言葉にユーリは複雑な表情を見せる。

「もちろん、責任を持って預からせてもらうし、戦力が増えるのも吝かではないのだけれど……。でも、ミルテアさんとはかく、アーシャさんはスイ君と同行した方がいいんじゃないかしら」

「それは厳しいでしょうね——」

すぐさまユーリの提案を遮ったのは、シャムシャオである。

「——想定される最悪のケースは、アルドヴァルド王国と『魔女』が同時に攻めてきた場合です。そうさせないためにもアーシャさんには、ユーリさんに協力してアルドヴァルドを押さえてもらわなくては。それに『魔女』相手にまともに戦えるのは、私とアンビー様、タータニアさんぐらいでしょう」

その答えに、ユーリがむっとして口を開く。

「あら、私も足手まといかしら？」

「アナタは、ブレイニル帝国軍の指揮下に入る可能性があるのです、そういう意味では難しいのでは？」

「……まあ、それは確かにね……」

口を尖らせるユーリであつたが、実際にその可能性は否定できなかった。

張り詰めた空気の中、スイが提案する。

「そうになると、残りはタータニアさんと僕ですね。僕はヴェルの街のみんなに挨拶してから、王立図書館の書物を調べて『魔女』に縁のある場所を洗い出すつもりですけど……」

ユーリがタータニアに言う。

「それなら、タータニアさんはスイ君の手伝いね」

「ええ、問題ないわ」

タータニアの返事を聞いて、アンビーが口を開く。

「それじゃあ決定だね。ここから私とシャオは別行動だ。『魔女』の足取りを追ってアルドヴァルドに潜入する」

次いで、ユーリが全員に告げる。

「私達は、ヴェルにあるブレイニル帝国の駐屯地に行くわ。そこが今後の拠点になると思うから。タータニアさんは、スイ君のお手伝いを行く前にこっちに顔を出して欲しいの」

ユーリの言葉にタータニアが頷くと、最後にスイがマイペースに呟いた。

「じゃあ僕はその間に、一度教会に行きますね」

こうして、それぞれが今後の行き先を確認すると、再会を約束してその場を後にするのであった。



アルドヴァルド王国の王都、アクア Ril。

王都の中央に位置する巨大な白い塔の一室で、数名の男女が円卓につき、一様に沈黙を貫いていた。

漂う空気は重苦しい。

誰もが困惑か、あるいは焦燥に駆られているようであつた。

「まさか、このようなときに……ッ！」

熊のような巨軀の男——レムリオ・エルゲンが分厚い拳を机に打ちつけて沈黙を破るものの、皆口を閉じたまま喋ろうとはしなかった。

彼らが沈黙するのも無理はない。

彼らの国を守り続けた、もはや彼らにとって神と言っても過言ではない存在が、唐突に姿を消し

てしまったのだ。

その存在こそが、アルドヴァルド王国国王『光牙の魔女』レシュールである。

混乱が国内外に広がっていない理由は、『光牙の魔女』がアルドヴァルド王国の後ろにいるという事実が知られていないためである。

それはこの国の特殊な体制——「二王制」という制度に由来している。

そもそも、レシュール自身がアルドヴァルド王国の国王になりたいと願ったわけではない。彼女が国王になったのは、エイネスの時代に当時のアルドヴァルド国王から嘆願されたからだ。レシュールとしては、アルドヴァルド王国は、手駒くらいにはなるとい考えしかなかった。

『螺旋の魔女』を味方につけたガルソ王国のように、レシュールの名を借りることで箔をつけたいというアルドヴァルド側の思惑に、レシュールは乗っかることにしたのだ。

王国の頂点にはレシュールが国王として就いていたが、彼女は、国政に関わるつもりはないと公言していた。そういった経緯から、名ばかりの国王——御意見番とも言える立場であった。

二王制とは、二人の王が存在する制度だ。

アルドヴァルドには、国内外に知られている、もう一人の王がいる。

それこそが、かつてブレインル帝国に赴き、帝王アリルタ・ブレインル・メトワと対立した、アジベル・ノストラの姉で、公爵家当主である「公主」——リアネル・ノストラである。

神とも呼べる存在であったレシュールが突然消えた。その一報が国の重鎮達に伝わり、リアネルを中心にこうして慌てて一堂に会することになったのである。

未だに方針の定まらぬ重鎮達の間には不安な空気が漂っている。誰も最初に言葉を発することができず、互いに牽制し合っていた。

突然、線の細い男がゆったりと口を開く。

「……しかし、これは好機ではありませんか？」

平行線を辿る睨み合いを嘲笑うように、さらに続ける。

「レシュール様は、いつか自らが姿を消す日が来ると常々仰っていました。また、そのときが来たら、自分は二度と帰って来ることはない、とも。でしたら、我々も覚悟を決めるべきでしょう」

「……フン、さすがは〈公王派〉の筆頭——レディア家。陛下が消えた途端、うるさい小鳥のように囁きおって」

忌々しげに〈国王派〉であるレムリオが呟く。

「皆様はどうやらお疲れのようで、口を動かすのも億劫に見えましたので、代わりに私が囁きただけですとも、エルゲン卿」

細身の男、エフェル・レディアは何食わぬ顔で返した。

二王制下にあるアルドヴァルド王国には、二つの派閥が存在していた。

一つは、国王レシュールを支え、エルゲン家が筆頭となる〈国王派〉。もう一つが、表の王である公王の指示によって動くレディア家率いる〈公王派〉だ。

〈国王派〉はレシュールの意向を優先して動いていた。〈国王派〉には、選民意識の塊のような者も少なからずいる。レムリオはその典型と言えた。

レシュールの突然の消失は〈国王派〉にとつては歓迎できない事態だ。〈国王派〉とてきちんと国のために尽力し、力を蓄えてはいるが、勢力が弱体化することは間違いない。いつかは来ると理解していたが、それが当代であるとは思ひもしなかっただろう。

エフェルは、レムリオの取り乱す姿をひどく滑稽こっけいに感じていた。

エフェルは円卓から離れ、階段の先に座る女性——公王リアネルに向き直る。

「公王陛下。我々は確かに国王陛下の庇護ひごを失いました。ですが、国王陛下ご自身いつかこの日が来ると仰られ、我々〈公王派〉はその準備を進めてきたのです。影に徹してきた我々が、太陽の下に出るときがついに来たのではありませんか？」

「小僧、何を……！」

レムリオの横合いからの怒声に、エフェルは肩を竦すくめた。

「そう逆上しないでいただきたいですね、エルゲン卿。もう国王陛下は消えてしまわれたのです。」

これからは公王陛下が国を動かすことになる。それが不服なら、叛逆罪はんぎやくざいに問われますよ？」

「……ッ、ならば聞くが、お主ら〈公王派〉が収集していた過去の遺物——魔導兵器は何者かによつて次々に破壊されているというではないか。こんな状況で何をするつもりだ？」

派閥の筆頭同士の会話を、居並ぶ重鎮達は息を殺して窺うかがっている。

この十年弱の間、〈公王派〉は、各地に眠る魔導兵器の入手を試みていた。しかし、それらは、アンビー、アーシャ、そしてミルテアの三人によつて次々と破壊されてしまった。

アルドヴァルド王国の権力をさらに広げるといふ、レシュールがいたころは隠していた〈公王派〉の野望は、彼女が消えた今隠す必要などない。しかしその主戦力となる予定であった魔導兵器は消えた。

それにもかかわらず——エフェルはにたりと口元に弧を描く。

「我々は秘密裏に成功したのですよ、『魔人化計画』に」

「『魔人化計画』——ッ、あれは国王陛下が禁じた研究ではなかったか……？」

「確かにあまりいい顔はなさいませんが、しかし『魔獣』研究の中で偶然成功例が生まれましてね。彼女達は『魔獣』を自在に操る素晴らしい能力を持っています。最初は偶然の産物でしたが、すでに研究は進んでいるんですよ」

「何を考えている……ッ！ 人を人とも思わぬ禁忌きんぎに手を染めたと言うのか！ あの『魔獣』を操

るなど……。いずれ飼いだに手を噛まれるぞ！」

「ご安心を。——彼女達は、私には逆らえませんが」
得意気な表情で答えるエフェル。

その場にいた誰もが震えた。命を操り、人間を『魔獣』と同等の存在にする『魔人化計画』。それは人の命を弄ぶ行為だった。

「……国王陛下はご存知だったのか？」

「ええ、当然ですとも。さすがに驚いていらつしやいましたが、いつも通りでしたよ。ありがたい忠告はいただきましたがね」

エフェルがレシュールに『魔人化計画』成功を伝えると、レシュールは目を僅かに見開いたが、咎めることはなかった。ただ一言、「それが国のためになると考えたのなら、好きにするが良い」と告げただけである。

その話を聞いて、レムリオは嘆息した。

これまでも〈公王派〉は過激な行動を起こすことが多かった。それを咎めるどころか認め、静観するレシュールに困惑させられたことも少なくない。

かつてその態度に痺れを切らし、直言したことがあるレムリオであったが、その際に告げられた言葉が彼の口から零れ落ちた。

「——公王と国王。同じ国に在りながら二人の王を持ち、互いに研鑽せよ、か」

「アルドヴァルド王国の古い理念ですか。ですが、これからは公王様ただ一人がこの国を背負われることとなります。我がアルドヴァルド王国は、新生『アルドヴァルド公王国』として生まれ変わる、と言うべきでしょう」

——そして、エフェルは公王リアネルを仰いだ。

「だからこそ、これまでとは違うのだと諸国に見せつけてやれば良いのです、公王陛下」

沈黙を貫いていたリアネルがゆっくりと口を開く。

「……何が言いたい？」

エフェルの真意を問う。

「我々はとてつもなく長い時間、国王陛下——『光牙の魔女』に尽くしてきました。歴史の修正、改竄、隠蔽。世界を裏から操りながら、沈黙を貫いてきたのです。しかし昨今、西の蛮族、ブレインル帝国などが我らを敵視する振る舞いを続けています。これまで耐えてきましたが——、もう『光牙の魔女』はいない」

そこまで言つて一度言葉を区切ったエフェルは、深く頭を下げる臣下の礼を取り、再び言葉を続けた。

「我らが影に甘んじる必要はなくなりました。『アルドヴァルド公王国』として、表舞台に上がる

ときは今かと、私は愚考いたしました」

影に潜んできたアルドヴァルドの歴史を、ここにいる誰もが理解している。

旧時代「ヘリン」を終焉に導いたのも、それ以前の歴史を全て隠蔽してきたのも、アルドヴァルド王国である。レシユールの指示のもとアルドヴァルド王国は影に潜み続けてきたのだ。もはや、その呪縛から解放された。

リアネルは表情一つ変えずにエフェルに問いかける。

「……レディア卿、勝算はあるのかな？」

「今や、我らに恐れるものなどないかと」

再びレムリオが声を上げる。

「……あのような化け物どもを本当に御せるのか？」

それはその場にいる〈国王派〉全員の懸念でもあった。人を襲う『魔獣』を本当にコントロールできるのか。とてもではないが信じることはできない。

だが、レムリオら〈国王派〉の懸念を、エフェルは目を細めながら一蹴した。

「もちろんですとも。『魔獣』を誘導することは可能です。これによって、ブレイニル帝国とヴェルディア王国、それに周辺小国に対する数的不利は容易に覆せるでしょう」

エフェルはにこやかに言い放つとともに、リアネルへちらりと視線を向けた。

ここまでお膳立てしたのだ、断る理由などないだろう、と言いたげなエフェルの視線を受けて、リアネルは瞑目した。

国王レシユールが亡くなり、情勢が不安定になっている。この状況で戦争に突入すればさらに混乱するだろう。

しかし、〈公王派〉にとってチャンスでもあった。〈国王派〉を抑え、国をまとめるのは今しかない。

そこまで考えて、リアネルはゆっくりと目を開けた。

「良からう。アルドヴァルド公王が命じる。新時代の華々しい幕開けに相応しく、徒党を組んだ蛮国共を打ち砕いてみせよ。以上だ」

「仰せのままに」

エフェルは大仰に腰を折って礼を示すと、ゆっくりと顔を上げてその場を辞した。

重厚な扉の前で待機していた側仕えを伴って廊下を歩く彼の顔は先ほどまでの優男然としたものとは打って変わって、くつくつと卑しい笑みを浮かべている。

「老害どもが、『魔女』が消えた今となっては、もはや飾りにもならん」

「危険です、旦那様。誰が聞いているやもしれませぬ」

「フン、誰に聞かれようと気にする必要はなからう。——出来損ないを投入する。西の蛮族に頭

を垂れた愚かな国から始末してやろう。かの地は二年前〈国王派〉が失態を演じた場所。そこを制圧し、新たな時代の幕開けを飾ろうではないか」

二年前のヴェルディア王国王都襲撃事件において、〈国王派〉はスイを暗殺し損ねた。その落とし前を〈国王派〉である自分がつける。大国ヴェルディアへの襲撃によってアルドヴァルドの新時代の幕開けを大々的に掲げるという筋書きだ。

「魔導兵器が無事ならば良かったのだが。仕方あるまい。『魔人』と『魔獣』と魔導人形があれば十分だ。では、準備はよいか」

「御意に」



ヴェルディア王国へ向かって海上を進むアルドヴァルド王国船。その船室の一つで、何者かが激しく暴れていた。

金色の長い髪を左右で留めた少女が、苛立ちを噛み締めながら椅子を蹴り飛ばす。瞳は血走っており、気分が晴れた様子はない。荒れた船室のベッドに勢い良く座り込み、拳を叩きつけ、奥歯をギリツと食い縛る。

「ふーっ、ふーっ、……エフェル……ッ！」

かつてスイとルスティアの前に姿を現した少女——アンジェレーシアである。しかし、その様子は獣に近く、以前の飄々とした面影は微塵もない。

彼女は『魔人化計画』によって生み出された『魔人』である。

『魔獣』と同じく魔力を喰らい尽くすという特性を与えられた人間もどきであり、薬を与えられなければ生き存えることすら叶わない。そんな自らを、彼女は飼い犬のようだと思い、合成獣と自称していた。

成功例としての『魔人』はたった六人しかいなかったが、ことごとく戦地に送られ、命を落とした者もいた。

生きるためには、薬をもらうしかないが、そのために死地へ向かわねばならない。生きるために死地へ赴くという矛盾を抱え、その心は疲弊し荒んでいく。

そんな状況に、少女の精神が耐え続けられるはずがない。

アンジェレーシアの心はすでに危険な状態に追い込まれていた。

——いつそ壊れてしまえば、楽なのかもしれない。

ふと、そんな考えが脳裏を過った——そのときだった。

彼女の視界の先で、突然影が音もなく広がる。

「酷い有り様ね」

「誰だ!？」

声のする方向へ目をやると、人の姿を象るように影が浮かび上がっていた。黒一色のシルエットは徐々に人の姿を成していく。

胸元の開いた黒いドレス。頬に黒い刺青のような線。長い黒髪は編み込まれたまま横に流され、紫紺の瞳は遠くを映しているようである。姿を現したのは神秘的な空気を纏った女性であった。

特殊な境遇で何年もの戦闘訓練を受けてきたアンジェレーシアですら、その女性が放つ深い闇にあてられ、身動きを取ることさえできなかった。

そんな彼女のもとへ、女性はゆっくりと歩み寄り、そつと口を開いた。

『魔人』アンジェレーシア。アナタは、このまま利用され続けることを、受け入れるつもり?」

「……ッ」

「可哀想なアンジェレーシア。利用されるだけ利用され、心を壊そうとしているアナタの気持ちは、私達にはよくわかるわ」

「……誰、なのさ……! 悪いけど、今のボクは機嫌が悪いんだよ……! フザけたことを口にするな。その首を折ってやろうかッ」

手負いの獣のように睨みつけるアンジェレーシア。

しかし女性には怯むことなく続ける。

「私は『深淵の魔女』シア。アナタと同じ、利用された者。——同時に、アナタと同じ、支配者に抗う存在よ」

『魔女』、だって……?」

訝しむアンジェレーシアに、シアは微笑を湛えて手を差し伸べた。

「アナタの力は酷く不安定。早いところ、その胸に埋め込まれた術式と魔石を消さないと、取り返しがつかなくなるわ」

「——ッ、どうして、それを……!」

アンジェレーシアは瞠目している。シアは続けた。

「それは失敗した術式なの。アナタをその姿にしたアルドヴァルドの者はそう思っていないようだけれどね。その術式の根幹を作り上げた『断崖の魔女』は、これが世に出ることを許さず、封印して闇に葬ったはずなのだけれど……」

アンジェレーシアら『魔人』はエフェルが管理していた。その遙か上位に『光牙の魔女』が君臨していることはアンジェレーシアも知っている。だが、『断崖の魔女』が『魔人』に関わっていたとは知らなかった。

——シアは何かを知っている。



彼女なら、もしかしたらこの苦しみから救ってくれるかもしれない。そう考えたアンジェレーシアの前に、シアがゆっくりと手を差し出す。

「利用されるだけでいたくないのなら、抗^{あらが}いたいのなら、この手を取りなさい。私はその術式がこの世界に存在していることを赦^{ゆる}さない。アナタは——どうするの？」

壊れかけた心のまま、アンジェレーシアは藁^{わら}をも掴む思いでその手に触れた。

ベッドに腰掛ける彼女の身体を包むように、闇が広がる。

そして、その胸へ吸い込まれていった。

「ぐ……ッ、ううつ、な、何を……！」

「心配しなくていいわ。一時的にアナタの身体^{からだ}の歪^{ゆが}んだ力を抑え込むだけよ」

アンジェレーシアは、突然身体を襲った奇妙な違和感に咳き込んだ。

そして、しばらくして顔を上げると、闇の中へゆっくりと染み込むように消えていくシアの姿が

目に映った。

「ヴェルディア大陸で会いましょう。時が来たら、迎えに行くわ」

「げほっ……、ま、って……」

何が起きたのかわからないままアンジェレーシアは手を伸ばす。しかし、シアはその手を取ることもなく姿を消した。

先ほどまで感じていた憤怒^{ふんぞ}、焦燥^{きようそう}、虚脱^{きょだつ}、そうしたものの全てが、今ではすっかり塗り潰されて
いる。

アンジェレーシアは身体を倒して天井を仰いだ。

「ボクは生きられる、のかな……?」

そっと伸ばした手を握り締めて、たった今起こったことを思い出した。

スイ達は、『魔女』の情報を求めて。

アルドヴァルド王国は、新たな時代を築くべく。

アンジェレーシアは、救いを求めて。

——それらはまるで、導かれるように。全ての思惑はヴェルディア大陸へと続き、交わろうとしていた。

2 名も無き神

一行と別れたスイは、ヴェルの街へ足を踏み入れていた。久しぶりに見る街の風景と記憶の差異を噛み締めるように、周囲を見回しながらゆっくりと歩く。

「……ねえ、あの子じゃない? ほら」

「あ、ホントだ!」

行き交う人々が自分を指差して何やら騒いでいる。

そんな出来事にも、スイは違和感どころか懐かしさすら覚えていた。こういう扱いを受けることはスイの中では日常茶飯事で、氣にとめることはない。

——自分の見た目がおかしいことぐらい、自分が一番わかっているんだ。騒がれることぐらいもう慣れたさ。

そう本人は思っている。

スイは自分が注目されている本当の理由に気づいていないが、実はこのような事情があった。

二年前のアルドヴァルドによる王都襲撃事件がスイのせいで起きたという風評——実際は事実であるが——は払拭され、むしろ襲撃者を撃退した英雄だと知れ渡っていたのである。

ともあれ、そうした騒ぎに相変わらず反応を示さないまま、スイは居住区の第二地区にある我が家——教会へやって来た。

すでに自らの本当の出自を知り、自分がここに預けられた経緯を知らされたスイではあるが、や

はりこの教会が自分の家であり、この街が故郷なのだ。

久しぶりの我が家を見て、頬を緩ませていると、「スイ!？」と自分の名を呼ぶ声が耳に届いた。

「スイ、帰ってきたのね!」

「ただいま、ヘリア姉——つとと」

庭先で洗濯物を干していたヘリアに抱きつかれ、スイはそれを受け止めた。二年前なら間違いなく倒れていたであろうが、修業の恩恵はこんなところにも表れたようだ。

「スイ、おかえり。髪、伸びたのね。それに背も少しだけ大きくなったわね!」

「……ははは、うん。少しは、ね……」

抱擁を解いてまじまじとスイの姿を確認したヘリア。彼女の言葉に、スイは密かに傷つき顔を引き攣らせた。

「あれ、どうしたの?」

「……身長あんまり伸びてないかなあって」

「あはは、気にしないでいいのに。誰かに何か言われたの?」

「まあ、色々ね……」

基本的に自分のことには無頓着なスイが身長の伸びを気にしているのは、彼の周囲の人達に何度も揶揄されたからである。また、以前までは同じぐらいの身長であったタータニアの背が自分より

高くなっていることも、彼にショックを与えていた。

「スイが帰ってきたって!」

「ホントなの、ヘリア!」

「スイ兄——!」

次々と姿を現したのは、シスターのシエスカとイルシア、そしてスイに懐いていた子供達であった。それぞれに短く挨拶を返しつつも、スイの瞳にじわりと涙が浮かぶのは、子供達の背が著しく伸びているせいではない。断じて違う。スイは自分にそう言い聞かせていた。

そんなスイの視線の先に、スイの父とも呼べる神父エイトスが姿を現した。

「おかえり、スイ。すっかり大きく……なったようだね」

「ただいま、エイトスさん。今の微妙な間が、ちよつと気になるんだけど」

感動の再会は、「身長」という障害を前に台無しになったのであった。

この二年間の出来事を含め、そもそも自分がどういった経緯でこの街へ戻ってきたのか、またこの後、王立図書館で『魔女』について調べようとしていることなどを、スイはすべて話した。それは、昼食を挟んですっかり陽が傾いた頃であった。

教会の奥にあるエイトスの私室。

その場に残っていたのはスイ、エイトス、イルシアの三人。

ヘリアとシエスカも聞きたがっていたが、何しろ話はスイがこの教会に預けられた経緯——『魔女』に国王バレンが協力したという国家機密にまで及んでいたので、出て行ってもらったのだ。

スイの説明をひと通り聞いて、驚きのあまり目を丸くしたイルシアが改めて尋ねる。

「——それじゃあ、スイは『魔女』の命運を託されて、生まれたっていうこと？」

スイがああ『白銀の魔女』によって生み出され、『魔女』を消すという重い宿命を背負っているなどと聞かされても、素直に受け止められるはずがない。

「そうなるね。僕が得た『無』の力は、そのために与えられたものなんだって」

「そんな……。それじゃあまるで、『魔女』を殺すために生まれたみたいじゃない……ッ」

スイから聞かされた話が冗談や聞き間違いであってほしいと願うイルシアであったが、彼から返ってきたのは重苦しい沈黙であった。

呆然とするイルシアを視界の隅におさめながら、エイトスは小さく嘆息した。

「……やれやれ。イルシア、しっかりしなさい。私達が何を言おうと、スイは受け入れるつもりだよ」

「そ、そんなことを言われても！」

「スイの目を見れば、スイが自らの意志でそれを選んだのは明白だ。私達にできることと言えば、

せいぜいその決意を受け止めてやることくらいではないかな。それに今さら曲げるつもりも折れるつもりもなさそうじゃないか」

そう言って朗らかに笑うエイトス。スイも釣られるように笑みを浮かべた。

「ごめんなさい。心配をかけるかもしれないけど、僕はノルーシャ様のためにも、やるって決めたんだ。それは譲れない。どうして僕がこんなに重い責任を負わなければいけないんだと思うこともあったけれど、僕は『魔女』の苦しみを知ってしまった。力を持った理由を知ってしまった。そして、生まれた理由を知ってしまった。だからもう、決めたんだ」

——ノルーシャの『魔女』を解放してほしいという願い。それを知ったからには、逃げるわけにはいかないのだ。

スイの決意を目の当たりにし、イルシアは何も言えなくなった。

幼い頃のスイをイルシアは知っている。

「これは」と決めたことは、絶対に譲らない。王立図書館に通うと言い出したときもそうだ。イルシアはスイが通う理由を知っていたが、ずっと通い続けるとは思っていなかった。意志が強い、或いは頑固とも言えた。

「……そう。そこまで言うのなら、もう何も言わないわ」

「イル姉……」

「ただし、危険なことはしちやダメよ」

釘を刺すように言われて、スイは苦笑する。そして心の中でそっと呟く。

——それは、ちよつと約束できないかもしれないんだ。

スイの脳裏に、ノルーシャとの修業の日々が蘇る。

ノルーシャとの修業中、スイの魔法によって具現した『魔導書』。そこには『無』の魔法に関する情報が載っていた。

チェミが死んでしまった際に使った、スイが敵として認識した者を襲う、雪のように降り注ぐ魔法——【全てを無へ】。

『魔女』を解放すべく編み出されたとされる魔法——【呪いを消し去れ】。

この二つ以外にも、幾つかの魔法がそこには記されていた。それら『無』の力を扱うことにも修業の中で慣れていったスイであったが、一つだけ例外とされる魔法があった。あまりにも危険過ぎたため、全ての『宝玉』が揃うまで絶対に使わないようにとノルーシャに釘を刺された魔法が。

「——ところでスイ、この後、王立図書館に行くって言っていたけれど、『魔女』が関わっている書物なんてあるのかしら。アナタが読んできた本の中に、それらしい物はあったの？」

スイの意識が現実に取り戻された。小さく首を振って返答する。

「『白銀の魔女』のお伽話^{とてはなし}なんか元になった話ばかりだったかな。役に立ちそうな本はなかったと思う」

「となると、情報を得られる可能性があるのは魔法学園の書庫か、もしくは……王城の書架^{しよか}ぐらいかもしれないね」

「魔法学園の書庫と、王城の書架？」

聞き覚えのない二つの場所の名前に小首を傾げるスイ。それを見たイルシアが得意気に胸を張って指を立てる。

「私も噂で聞いたただけなんだけどね。このヴェルディア王国がヘリン中期に建国されたのは知っているわよね？ そのときにね、古くて重要な文書は、その場所に移されて閲覧が禁じられたっていう話なのよ」

エイトスが口を挟む。

「『魔女』に関して深く知りたいなら、そのどちらかを当てるべきだろう。ただ、本当にあるかどうか不確かだからね。もしかしたら与太話^{よたばなし}かもしれないよ」

「そっか。でも、可能性があるなら行ってみたいな……」

あくまでも噂だと釘を刺すエイトスであったが、少しでも多くの情報を得たいスイにとっては朗報だ。

ふとスイの視線がエイトスの机の上に留まった。

一冊の分厚い本が置いてある。

「ああ、これが気になったのかい？」

スイの視線に気づいたエイトスが立ち上がり、その本を手にとった。

「これはこの教会が祀^{まつ}る神の聖典だよ。そういえばスイには、この教会が信仰している——いや、していた神について、話したことはなかったね」

エイトスに言われ、スイは今さらながらに気づく。

この教会が教会たる所以^{ゆえん}。教会が崇める神、教えている宗教について、これまで聞かされたことはなかったのだ。

「これはね、『名も無き神の聖典』と呼ばれている」

「『名も無き神』……？」

「そう。それにね、確かにここは教会という役割を与えられているけれど、この教会には今、信仰する神はいないのだよ」

「え？」

「七十年前の魔導戦争当時、この国の王侯貴族には王国派とは別に、教会派と呼ばれる一派がいたそう。当時の教会はとある神を信仰し、この聖典の教えこそが絶対であると唱え、戦争して他国

に神の教えを広めようとした。当時のヴェルディア王国は今とは違って王侯貴族の権力は絶対的なものでね。これによって多くの民が戦争に駆り出され、帰らぬ人となった。——おっと、そうだ。ここを見てごらん」

聖典を捲^{めく}っていたエイトスが、とあるページで手を止めスイに差し出した。

「ここに書いてある『金翼の神使^{みづかひ}』という言葉に、思い当たる節はあるね？」

「……ッ、フアラ、ですか？」

「そう。あのとき——スイがああ金龍と〈使い魔〉契約をしたときから、やはり不思議な運命に導かれているのだと確信したものだ。他国ではその神使^{みづかひ}こそが神であるとされている地もあると聞くがね」

その話はスイも王立図書館で読んだことがある。

遠い異国では金龍が神として文献に記されている、と。だからこそスイは、フアラと初めて出会ったとき、「君は〈使い魔〉になるような存在ではない」と、契約を拒んだのだ。

「ともあれ、この国は魔導戦争で教会派が多くの血を流す選択をして以来、この『名も無き神』の宗教は禁止されることになった。本当は名はあるのだが、その名は棄^すてられ、今では『名も無き神』としてのみ語られる。今では教会は『教えを与える場所』だった名残から孤児院としての役割を果たしているが、『信仰を広める場所』ではなくなった」

「そっか。それでもエイトスさんやイル姉は神父とシスターだね？　つまり『名も無き神』の信者である、ということ？」

「私やイルシアは元々ここで育っただけで、信者ではない。神父やシスターという名も便宜上使っているだけだ。ただ、聖典というの不思議だね。信仰していなくても、色々と学ぶことはある」

「でも、宗教として活動を禁じられているなら、やっぱり肩身が狭かったりとか……」

「七十年前はそうはいかなかっただろうけれど、今ではここは孤児院としての役割しか果たしていないからね。私達が肩身の狭い思いをしているということはないよ」

「そっか。それならいいんだけどね……」

スイは、初めて聞かされた話に驚いていた。しかし、それ以上にスイの脳裏には『金翼の神使』というフレーズが頭に引っかかっていた。

「ファラ、起きてる？」

スイの声に呼応するように光が生まれ、金色に輝き出した。人の姿で現れたファラはどうやら眠っていたようで、出てくるなり眠たげに目を擦りながら周囲を見回した。

「あれ、着いてる？」

「気づいてなかったんだね。もうヴェルに帰ってきてるよ」

ファラの間の抜けた声に、皆苦笑を浮かべる。

ファラは気にせず、スイへ両手を伸ばして抱き締めた。

「んー……？　あるじさま 主様、小さくなった？」

「……ファラ、ガルソを離れてから子供サイズでいるのをやめたこと忘れたの？　大人サイズに戻ったからそう感じただけだと思うよ。それに僕だって背は伸びてるんだけど」

少しだけけど、と小声で付け加える。

ファラはぐりぐりと自分の頬をスイの頭に押し付けた。

「前よりちようどいい位置。頭の位置も少しだけ近いよ」

「少しだけとか言わなくていいからね」

「あるじさま 主様の頭さらさら」

「……聞かないのかな？　ねえ、ファラ？」

そう言いながらもされるがままのスイ。

エイトスは一ツ咳払いした。

「なんだか、金龍とは以前よりもずいぶんと心安い関係になっているようだね、スイ」

「ファラが幼くなったのかもね」

「むー！」

そうやってスイに抱きついて頭を押し付けるファラ。スイに甘えるのは相変わらずだが、以前よ

りも無邪気な態度だ。

ノルーシャの家で子供の姿を取っていたことで態度も子供のようになっていた。以前のように気を張って接するファラの姿はすでに微塵もない。

スイは今の方がファラらしいと思う。また、ファラもこの方が気楽なのだ。

「ファラ、これ知ってる？」

ファラはしばらく眉間に皺を寄せて考えて、答えた。

「んー、知らないよ？」

「そっか。これってファラのことを指してるんじゃないかって思ったんだけど」

そう言いつつ、スイもファラが知っているとは思っていなかった。

伝承やお伽話の類は、本人の知らないところで語られるものだ。ましてやこの聖典は長く人目にさらされなかったものである。それに、ファラが神として扱われることを好むとは思えず、興味もないだろうと思ったのだ。

聖典に興味を持ったスイは、エイトスに尋ねた。

「エイトスさん、聖典って僕が読んでも問題ないですか？」

「ああ、構わないよ。持ち出しは困るけれど、部屋で読むなら貸し出そう。ただ、あまりのめり込

むのはオススメしないよ。『名も無き神』の教えは、些か過激なところもあるからね」

「過激、ですか？」

「ああ、そうだね。最終章の最終項にある、『世界の救済』。そこに書かれている内容は、まるで世界の終焉を願っているようだからね」

「そ、それは……気を付けます」

聖典に世界の終焉が書かれていると考えもしなかったスイは、顔を引き攣らせた。

ともあれ、一度目を通してみるのもいいかもしれない。そう考えながら、スイはファラに抱きつかれたまま礼を言い、二人を驚かせるのであった。



スイがヴェルディアを離れていたこの二年間、ヴェルディア魔法学園は大きな変化を迎えていた。七十年前の魔導戦争時のように、魔法学園が軍事拠点化されたのである。

縦並び三列の学園の建物のうち、門から入って最も手前にある第一棟は、ブレイニル帝国軍とヴェルディア王国軍の駐屯地として利用されている。学園寮の一部はブレイニル帝国軍用に切り替わった。